

# 親子関係・家庭基盤および集団保育のあり方に関する文化人類学的研究

原 ひろ子（お茶の水大学家政学部）

現代日本では、既婚婦人の就業率の増大、子どもの数の減少などの諸状況の下に、育児を誰が担当するか、母親はどのように子育てをするべきか、父親と母親はどのように子育てに関するべきか、集団保育、一時保育において、保育者と家庭とがどのように連携することが子どものためになるかということが、切実に追求されねばならぬ現実的な課題となっている。

さらに情報化社会の進展の中での子どもの成長をめぐる、家庭や集団保育の場で親や保育者がどのような関り方をすることが望ましいかについての見通しも必要である。

このような目的のために、私たちの研究グループでは、以下のような2つの研究を同時進行させつつある。

1. いくつかの狩猟採集民社会における、子どもの成長への父母、キョウダイ、親族の関り方と共同体内の子どもの群れのあり方、さらに子どもの「自立」過程に関する文献研究を行う。

対象とする狩猟採集民社会は、Barry等の論文を参考に選び、まず東京近辺の大学、図書館、個人所蔵の文献を渉猟することにより、また、次年度には、国立民族学博物館所有のHuman Relation Area Filesの資料を基にする予定である。

2. 58年度から3年間にわたり、子どもとテレビとの関わりを詳細に把握することを目的に、参与観察を含む事例調査を実施する。

生活様式、行動様式の基本型が形成されはじめる入園前の幼児を対象に、その母親に8日おきにインタビューし、他の生活行動との関連の上でテレビ視聴行動についての聞き取り調査をする。一週間分の聞き取り調査が終わった段階で6カ月の

期間をおき、同じ幼児に同じ方法で調査をくり返す。このような継続的なパネル調査を通し、子どもがテレビにどう接触し、どのような影響を受けているか、さらにテレビ視聴をめぐっての母子関係が、どのように機能しているかをその発達過程の中で把握することを試みる。

上記、2つの研究は、一見、お互いにかけてはなれたように感じられるかも知れないが、「子育て」を今日の視点でとらえなおすときの、基本的な問題として根底で、直接につながっていると考えているのだ。

## 昭和58年度研究報告

子どもの成長をめぐり、親および保育者の関わり方にも社会文化の変化に即した対応が迫られている。そこで、当研究班では以下の二研究を同時進行させている。

1. Barry等の研究(1976)その他を渉猟し、さまざまな諸社会の子どもの育て方を分析中である。狩猟採集民に関してみても、ピグミーとブッシュマンの社会は、低い人口密度、非定住性、小集団などの共通点があるが、子どもの自立に関しては、前者は早く、後者は遅い。このような差は自然環境、狩猟法、価値大系などの相違が関与していると思われる。

2. 2歳後半から3歳前半の幼児を対象に、テレビとの関わりを詳細に把握することを目的に、参与観察を含む聞き取り調査を実施中である。現段階では、言葉や態度をはじめ、ごっこ遊びに至るまで、CMやアニメキャラクターの影響が観察されている。母子関係を含む家族関係をも視野におさめながら、さらにきめ細かな調査を実施する。